2836
713

文政甲申春發閣

四方歌垣先生見脉
乍昔堂主人處劑

麻疹瘡語

翻刻御勝手次第
決而不及御沙汰

麻疹瘡語序

曩時武亭主人麻疹戯言を
著せるに、そのふるあらはれ
かゝ式識に世上の驚を
よろこばせて戯作の新図をひらき。
春毎の彩板をしるす。作者の

饗庭藏書

へ
2836

悪ざる事多く繊條の
擱桿和野の鍔よがりやゝ筆。
磨疹鬱気を絶原と邂逅の
撰鐘をとうがらして。新著作者様
作者堂一番作を出して来れ。
はしの語路の十鰯儀臭さと

追物好ぢや。あゝある贅言を
肥しにもし。継は浅膳語を
借く様事。悪ことあてふぬゑ。
禁ふ物の常生例賽。書班撰様
餘蕉躁ち球年中小風を
済行様だ。葉顔で足残

窓まんとすれば
句の林額ろかすと
熟と砧と臘燭の影

程敬堂主人

申秋春

禁食

醬來蘇所吊麻疹
粉茶飯屋御粥銭
日暮醫門傳燈燭
昂而顚敲五雲家

右唐詩翻案　蜀山人四四

萬家疫疹庸醫怕不貼神符即禁方唯有剃防敗毒散升麻加減葛根湯
蜀山人題
久須利屋
九惣兵衛
林疹の丸めぐすり
升麻葛根湯

葛西金町半囚村
稲荷神僧皆御存
振幟鳴鈴踊出守
疱瘡麻疹軽如猿

四方歌垣題 四方

麻疹瘡語

作青堂花守著

朝夕ふる雨にあらそ恨をしらす。
呼の向ふの浦島山。向嶋の梅
屋敷も。新の字のあるゝ内
てゝ。ひの。紅夕日見ふるゝ。
秋の七草なんでもあく。遠土乃

鳥を翔りあるきく軍く時。
郭公は初音も別れ去て却ぼ
めれど。根岸や本場の別荘に。
夜る昼やまず鳴けば。ひのもの
ある毛耳をうしく。此里過ぎ
ぬ。元禄年中に市松深も。
よ思ふ時も。ひるぐし。
○ぬも。宝暦年中に市松深も。

年を経て深出せば。石畳のきみ
うくきくまでをてを中て。花ぐもの
鼻を印ぎ。成田屋が業ドの中ふ
嬉しがり。法娘子や法新造の。
義経模様法せても。親法も加藤
ひ。陸奥ー。
たり。実深年なる人ぞ張。

芝翫茶の始まれる紙しも。いろいろ
加賀屋の評判とふ色さえ。
梅幸茶大和撫の江戸深キ
うりも形き。新内ぬ乃
さる所中ふ。ひ行ふと通八河東
茶のなりと。十寸見要集を
懐ふ。右をぶ新

きと。知ると云ぬもいく。
松の内ふり出る世の年。松の
内ふ多所と。時ある式
茶書より。世上一般に麻疹病
流行しく。千門茶戸此法。
評判紀の封きと。市川團十郎が
大當り社藝評より。

難渋労の嘆は絶えず。そもそもこれは
梅干がある。うたのこそ八頭積
草が蔓ッこのと。夢おぢをきの
中ゆと。あるは物もまたしゆ
爺。物好の若人も。麻疹ゆふ
どんな物ぞと。ふくさん思ふと
はるべし。見てゐが糸瓜の皮。

鍋の底を洗ひ中なる顔色
なるはバ。一番貴しとは難。洗ま
らぬ物ぞはるべし。二十年
ぶりでのさ中り物。色ぐ〳〵ぐるも
ぶ理でなし。此病去年乃
師走の末だ〳〵。毒風邪吹き
美り。所當地ゑ初めゑ。

繪よ捕を打る牛もも。一粒麻児の
中なりしが。年去くるあしと
よりも。美薬屋が扱集やりく。
実年同出こう陣しんますと。
祝のく往〳〵洞ふ老ぬぞ。拵拵
くくをくくまのちゆこ。あり
ちくちちくと傳深〳〵。麻秀

まもく雲なるまで。天道様の郭と
もけやや。昔よかくりて世るくよく。
くりくく出拵ひく。今去祝
メの麻の薬ちやく一面よありね。
くくで御江都の鷲華の地方。
四里四方の其間。実乃門あと
をかの妙薬。かくちち表あの

麻疹の奇方と。筆をよろこばせる間ゆ合招牌のおびただしき。
仁の御ゆゑ御物なりあり。ぱしかぜを。しくやうと。人ぶしの
多羅葉よ。変どの弱をそくく
費あるく奴あるもの。食物の能
毒を施印して配もあり。おもも

らそ。しく陰徳に仕ぐく形
ぎん紙づくへ。損をしるの毒
ふ禁物のゆ潔あるそなるべ
ゑもで。軽いたしうは醫者をる
たのまぶ。多くそ前防敗毒散
升麻葛根當分の。買藥あるの
仕く形もで。薬ある用を毒ぞふ熟

續せし。麻疹精要を精がつゝく。
ハレ藥代もなりがたつぶやく醫
家と多くつゝく。既に調子去く
梅幸秀。疱瘡猖獗つゝく麻疹
形つる。諸よ禍福セよ後びし
八起。通り町の人形見世。
うゝぬ達磨白眼にしゝく。

世上の人を恨しゝまはしゝみ。
はゝしゝを頬をふゝかゝく。悔
張る狂木兎のやく。又新道の
矣饅屋る。閑廊の音を絶ぐ
やく。鋼の長ひ棒も火の消ゝ
やゝふ淋しゝく。焼る狂ちまた
頭痛よかつ。鍋焼の派亀を。

こうらも又ぞうしゝと刻まぐ也。
青息を吹くだらりゝさるゞ市に。
豚の沈んゞ生藥屋も。惣ち
息を吹くゝし。野巫めゝと功ゝ
物よ病こび。澤庵老も玄伯屋。
番くかくやと廻ひゝまゝ。
病家四方に多ゝ病を。廻り

かぬゝ。鼠の めく。俄か竹輿よ
尻をくゝす。忘れゝ雲中に。
葭町の色子達の。今度の麻疹ふ
平氣なゝ。信濃守公行が。ひゝう
のゝ。しゝ。ゝひゝ。享和の
流行に相撲ゝ。ゝと拍子く。
ゝけなゝ都ゝ。拍ゝ

程も推量さること。衣紋の繕ひ
何となく。色糸がさめくさるゝ。
此時も苔ツるゝ。深川やゝ
家根舟を。鼻の下ゝとゝ
千あぐるも。吉原通ひの置駕を。
肥とゝしく留に注るゝ。
唯ゝ此乗物の。大門の

出入昼夜を。中の町
櫻もあるが。延引しる。
寂しゝ。増る夕暮。羅生門
呼呼の気なる。茨木が、
又此大格子。
寂とゝく。渡邊退去遍照寺と。
腕をとゝ腕をばうかゞよ。

全盛の地らんを。初發の熟れ
初金まるも。揚屋千にあひ〳〵仏地
あく。つゝ〳〵千日をまる拍〳〵。
酒をのまんぶ猪〳〵藤の。さみ
〳〵きは数を送れど。美てる
迎ひをなる〳〵れ所。喰〳〵さと
〳〵橋く起る。内證へ向ひて。

地蔵の毒ざんすとゝへど。こゝを
向ひく吉を出さる。贅沢千
見せ〳〵仏癖あゝん。又都屋
方の病上りる。色の影のよ美銭
〳〵〳〵〳〵。仙女香へ人だをかる
赤橋中橋。地蔵内黄の地獄
三勝笑る。〳〵熟美銭

かこつけく。朝起の苦とのべの紙。
高軒の初まづゝゆを。横訛そゝる
國ぎゝゆく。いめ分美もの物だ
あゝぬと。小唄うゝめうす長ゝと
なり。筆ゝ蒔盤ぎゝひの小二ゝ。
ゝゝをえゝゝ仍ふ引うぶり。流
俳の病と。肥立の後ぶで假

病をかまゝく。居腫の痛ゝ我
ゝゝと。麻疹と海鹿の間違ひ
あゝんう。かる強きぎ肉めと
はぶ。ちうを出ぬ若いものゝ。
ゝゝゝんが出も麻疹と筆ど。さ
ゝりが出ゝと ちゝかと驚ゝ。借
金多き物前ょ。たのんませゝ我

冥くぐめく。びくくして。神でも
屠ぐもなる物を。南亀麻疹様
もくくなる。どくくの毒下さも
ませと。押入よ居る間支の如く。
首をちぐ先く知ろくがあも。
さうとも氣の毒千萬なり。
抑此病の元ハとうく。六府腸胃の

熱毒肺を蒸し。外風邪よ裂ど。
或ハ乳食湯ハざくくもの。
内熱發くく麻疹となる。疱瘡
神社未社よ行く。風の神乃
袋持ぐくなる。愚花守熱
徒古を考ふるも我
皇朝三十代。欽明天皇の十三年ゐ。

西土より始めて渡る。國民病て死る者多うしてしうば。稻目瘡とよびて忌嫌しを船しをなん。是頃曾我の馬子の父稻目宿弥蕃神を多信ぜりしを。稻目瘡といひしと。是後敏達天皇の十四年に。

此時疾ひ又國中に流行す。此間三十四年を隔ぐ

夫より聖武天皇の天平九年。此間百五十二年を隔ぐ是後星霜重なるゆ経て。一條天皇の長徳四年に大きに疫病。納言以上薨る者八人。四位七人。五位五十四人。六位以下の僧侶多し。不可勝計。此時

麻疹を赤疱瘡とよびて。恐るべきものなりし。此間二百六十年を経て又後一條
天皇の万寿二年。此間二十六年を経て白河帝の
長暦元年。此間五十四年を経て鳥羽帝の永久
元年又流行せり。三十六年目なり土御門帝の
建永元。九十三年を経て後堀河帝の嘉祿
元年に流行し。同じ御代の安貞

元年。三年間猖獗ありて又
流行せり。後深草帝の康元元年。
此間九十年を経て後二條帝の德治二年ハ
大風雨し後久しく。此疾病乃
行はれしるを失ず。其年
百六十四年を過て。後土御門帝の
文明三年ハ大流行し。十二

年を経て地位じく文明十六年か
又たもつて。後柏原帝は永正十年。
此間二十九年也 後陽成帝の慶長三年に
ゆるす。此間八十五年也 東山帝は
元禄四年。此間九十三年也 中御門帝は享保
十五年。此間三十九年也 桃園帝の宝暦三年。
此間二十三年也 後桃園帝は安永五年。

此間二十八年也 先帝の享和三年は四月より
五六月盛ん流行す。去年文政
六年の十二月頃。例の如く西國
より伝染し。正二月の程既に
盛んなり。此間廿一年 此疫瘡
廿二年に及べり
皇國ふたたびしるす。欽明敏達は
御宇よりして。今度にいたるまで

つくる度といつかるを志らば。是も
國朝の旧記せふこんくるのゆく。
伝へしるしるしと多く伝屋し。
扨疱瘡ふ神なりもだ。麻疹の神を
あるものとゆ。川くふこそげる馬
鹿律儀。かなるず廿一二年に。
間違なく流行るもの。これ正直

なる神こぞこと。思ひ込でる編屈
者。孫子のまたいひ伝へて。廿餘
年を指わく。ちをのへるが不便
さふ。かくまでハしく年紀成
志伝し。西人の惑ひをさゆ
きんとす。まづ世病ひのもとり
しるす。久しき時を百年ろ。二百

年も間あり。又邪氣ゝ盛んなる折ふし。三年同よりたるもあり。こゝを以て此時。沢しく神の為業よ非ず。疱瘡神ハこゝとゝかたく。眼前曹司が谷よ。鷺明神の幟をひるめせ。下総よ芋の神社が石をいぐし。

湯の尾峠の孫扨子。つゝを城ゝ霊験あれバ。さゝら三八も如宮をやしろ若狭小浜の六郎左衛門も。神酒倭へをゝくあす。それゝ延喜式の神名帳ハ名をたぐうと。宇田川町ゝ裏ゝ芋屋

とりて家名をとゝなへて。やうゝく
近年半因稲荷の祟振りゞ。
疱瘡と狂い麻疹もかるゝ出。
ひゝ口よりひゝ出して。どうやら
痘神の居所のやうよもきゝて
やれど。まゝ赤の飯みとあり
つゝび。醴とふるまゝび。未兎

遠慶の所伽もゝゝに
神ゝゝいひゝゝし。をゝ神ゝ在
物ゝゝバ。ゝゝ厩の隅ふたゝひとゝり。
ちやゝんで居ゝゝも家へ出ゝゝ。
一問答いゝゝれもと。洛圓屋ふ
あつゝぎ立。七厘のかゝ炭のやく
地ゝゝも。病ぬゝゝゝふ唄哉

痛くし。起て磨結をいつ
つもみや。茶箱を枕やうくつい
ところくと寝るうと思へバ。土瓶の
湯気どろくと。立あぐりたる
中より。怪しきる者こと顕れ
こと。一とせ来る藤屋の親方ゞ。
青面金剛神ゝ份ゞ来る都色

あく。臺所の板の間を。ぎつくりと
一ッきめ。ちつくとゆんで滑く
いとく。我ハ是を方ゞ無いものと
いふ麻疹の神と。我ゝ西土の
えびをより来る神なれバ。
此日の本の系図たゞしき神ごと。
中くに敬ちなくべらとず。夫ゝ

延喜式などにも新宮なる稱
ぐさと。邪正こそハかたけれ。
神こそも神と。何ぞ麻疹に神
かしといひべくんや。昔阮瞻無鬼
論を執せ。鬼来りて問答
せり。汝かゝ本の燭をうばふこと。
我とりがゝをやとせる。野幣

間の江戸神のめぐく。又疱瘡神社
食客と坐りて。たゞめゆとうえ
るおとく。我も欽明敏達乃
朝よ此地ゑ渡り。疱瘡ハ聖武社
御宇にこそ来。我ゝ八百八十
餘年の新糸着こそ。あゝ新古の
席論ハさゝ。疱瘡ハ美目宮め。

たゝ一つハ命宝あといひく。我を知らず。
錦井が敵役のめく。達磨未兎成
拙とちやゆ〳〵。祝ぐり食ひまる
半尼敵と。同日の論よあゝず。其
達磨や未兎も。たりゝを軽いもの
なり拙を。軽ふ和ふあゆれとて。人も
贈る我も買へども。軽いとつのもと

面敵なゝ。浮石カルメイラを
尼ゝ和ゝ痘痕よ似くきまるく。
かゝまきべゝの名もあをを。軽い
澤も峠が軽和。かゝ軽けくる
時ゝ。尻の重ゝ達磨どの。二便の
通ひも居なゝふ。たゝ拙知るとあく
仕ゝなひ。尻の磨りく九年

越。腰がたゝぎもつゞかせん。そゞ
くとそのめく。目玉だうり多
大きくて。昼間ゝゝぬき明盲
同然。ゑゆゑの闇社親ん。此家の
疫瘡をまねゞく。美なくあら
ゝん給へと。産土神お祈ぎとし。
百どり社 机代よ。神酒洗米城

祈を。疱瘡神へ出 榊 昆布 取手。
庚申 走ヤ ゆ と ゑ ろ え 馬 麻 を
尽せハ 虚ヤ 乗ど。何のゝ社との
祝ぐも 食ひ。 皇國の神ゝ
神ぐゝ。たるゝふゝをあハし
ゆゝのゝふく。煮 深 強飯の法
まゝ 食ゝ 越ハ。 取ゝ

我類ひの蕃神ハ萬國よりそれ
なる日本の米の飯。池田伊丹乃
御神酒ゆゑ。喉を潤して飯
食ふ事。殊ニ西宮の大尽ハ吸物。
上汁をけつきたらぬ吸ものを
ゝ。かの未社のゑびすどもが。坪
平まで代くちをゝ。焼ものを

引うへしてゝ却る格ゆゑ。奥さまくゝ
笑ひもつゝ。かくゝで仲間乃
あるゝをいつのゝうなる神ゝ。毎年ゝ
疱瘡と違ひ。坊ゝが仲間を二
三十年ゝ。適ゝよ来る宮ん
ゆゑ。そ独程の石ゝ候ゆゑハ
せゝ。そゝを却ゝ痘瘡より見

事かし。麻疹の神ハあるものとも。修りあるいひ伝あり。麻疹あるを疱瘡瘡ともいへり。神へより神あるもこだ。疫瘡とも國史あるもとも。又長德乃記ア。

四月廿三日乙卯勅聞天下患疫疾者巨多宜給官符五畿七道諸國奉幣轉經祈禱除災とゝえゝり。あ扨ゝな疱瘡麻疹ゝゝり風の影ひまぐゝも。

夷狄の神社多ゝそゝぐれバ。皇國の御神よ奉幣ゝゝ。邪氣をさゝるゝあ扨ぐ。必らず神なゝゝゝいべゝぐ。神ありゝゝ

うちのみひ[illegible]屋[illegible]ぶ。かう采屋を
打ぬく。[illegible]せるうりゆる。
肥[illegible]後の不[illegible]生毒獣乃
薯蕷ハ忽ちふ鰻と変ず。葛根
湯をあぶるより。汗をとるハ仕難
湯う。熱炯を引くぐつと揚る
のゞ早ちかどと。[illegible]勝乃

素人癒治。[illegible]ぐ[illegible]あ[illegible]。
[illegible]命定めぐと。我等ゞ
業よいひさぐる。馬鹿者多き世の
中あ[illegible]。[illegible]を[illegible]推
[illegible]。よ[illegible]ふ[illegible]給
[illegible]と[illegible]。
[illegible]ば。引[illegible]の[illegible]

鳴く。さてやぐらをつと飛ぶと鳴くなり。
丁雉子供の熟とくとふ。うくく
鶏の鳴くさめふるも

麻疹瘡語終